



雲

大口高校だより



鹿児島県立
大口高等学校

〒895-2511 伊佐市大口里2670

TEL 0995-22-1441 FAX 0995-22-9227

“笑顔満祭 輝憶になれ！～Dive into the Festival～”

6月14日、第78回文化祭が盛大に開催されました。同窓会提供の「プレミアムチケット（100円券）」を手にした小中学生が次々と訪れ、加えて一般の方々もたくさん来校してくださり、完全にコロナ前の賑やかさを取り戻しました。ある中学生は、「大口高校はとっても楽しい。こんな雰囲気の学校で高校生活を送りたい」と話してくれました。



大口中央中学校高校体験入学

7月3日、伊佐市立大口中央中学校の3年生が大口高校を訪れました。前半は、生徒会役員の案内で授業の様子や校内施設の見学を行い、後半は本校の1年生とワークショップ型の交流会を行いました。参加者の感想文には「初めて学校の中まで入った。先輩たちがいきいきとしていて、活気ある高校だなと感じた。」などとありました。



菱刈中学校、生徒による高校説明会

7月2日、伊佐市立菱刈中学校で開催された高校説明会に、大口高校からは生徒たちが出向き、学校生活や探究活動について紹介しました。本城おきなぐさ春まつりを通して地域の活性化に取り組んだり、大口高校を自分たちでPRしようと、学校案内パンフレットやポスター作成に取り組んだ活動を紹介していました。



JAL中山支店長が進路講演

6月17日、日本航空(株)鹿児島支店の中山洋彦支店長を講師に招き、進路講演会を実施しました。高校時代に部活(野球部)と勉強を両立させて頑張ったこと、客室乗務員として世界中の様々な人や文化に触れたことが大きな財産となっていることなどを熱く語り、「自分の能力に蓋をすることなく伸ばしてください。」と生徒たちを激励しました。



笑顔爽やか教育実習生

6月30日から7月18日までの3週間の日程で鹿屋体育大学4年生の植木一喜先生が教育実習(保健体育)に来ています。植木先生は、大口高校在学中にカヌーでインターハイにも出場し、全国大会4位という輝かしい成績を残しました。将来は高校の教師になるため、一生懸命実習に取り組んでいます。せっかくの機会ですので、授業だけでなく様々な場面で話しかけてみましょう。



親と子の学校説明会

6月24日と26日の夜7時から中学校3年生とその保護者を対象とした学校説明会を実施したところ、2日間で約50人の参加がありました。生徒は主に学校生活について、保護者は学費について熱心に説明を聞いていました。全体会終了後は個別の相談を受け、可能な範囲で丁寧に回答いたしました。



取材と撮影技術の講習会

6月24日、総合的な探究の時間に、取材と写真撮影の講習会を実施しました。講師は、伊佐市役所秘書広報課の池島主査とマツモト写真館の小林さん。取材や撮影を行う際のポイントとテクニックを分かりやすく講習してくださいました。今回学んだことを総探の活動に生かしてください。



一日体験入学のお知らせ！

7月31日、中学生一日体験入学を実施します。興味深い授業に参加したり、部活動体験もできます。もちろん、冷たい飲み物や大口高校米(マイ)クッキーのお土産も準備しています。ぜひご参加ください！

大口高校ふるさと歴史講座「伊佐の地で語る西郷隆盛と西南戦争」要旨その1

大口高校では、生徒、保護者、教員、そして地域の方々が一緒に楽しく郷土の歴史を学ぶ「ふるさと歴史講座」を開講しています。これまで「考古学から見た伊佐の歴史」、「伊佐の猛将・新納忠元」、「山野線と伊佐の繁栄」をテーマに取り上げ、第4弾となる今回は「伊佐の地で語る西郷隆盛と西南戦争」をテーマに開催しました。

明治維新最大の功労者である西郷隆盛の没後150年、高熊山に代表されるように伊佐でも多くの被害が出た西南戦争150周年を再来年に控えたこの時期に、そしてこの伊佐の地で「西郷隆盛が目指したのは何だったのか」、「西南戦争とは何だったのか」ということを、市民の皆さまと一緒に考えようと西郷南洲顕彰館との共催で企画しました。

今回も、50人の募集定員は受付開始後3時間余で満員となり、キャンセル待ちが多数出る状況でした。特に、最終回の公開シンポジウムは多くの受講希望者が想定されたため、300人収容できる菱刈環境改善センターで開催したところ、ほぼ満員の250人もの方が県内外から参加されました。

初回に行った開講式では、西郷南洲顕彰館の賛助会員でもある橋本欣也伊佐市長に御挨拶を賜りました。来年は新納忠元生誕500年ということで、伊佐市も官民挙げて様々な事業やイベントを行っていくという紹介がありましたが、さらに再来年は西南戦争150周年ですので、引き続き有意義な事業を展開してもらいたいと思います。

今回も、定員オーバーで受講できなかった方、遠方のためあるいは仕事のため受講できなかったという方のために、講座の要旨を数回にわたって紹介していきます。



【第1回目】6月18日(水)18:00~20:00

講師：徳永 和喜 先生（西郷南洲顕彰館館長）

鹿児島県歴史資料センター黎明館の調査史料室長、学芸課長を務めた後、現職。もともとは戦国時代から近世における対外関係史が専門だが、現在では西郷隆盛研究の第一人者。

今回は、6回シリーズの講座のトップバッターとして、西郷隆盛という人はどのような人物だったのかということを紹介していただいた。



テーマ：「西郷隆盛の生涯と功績」

西郷南洲顕彰館の建物は、実は江戸城本丸の石垣をイメージして造られています。なぜ江戸城かといいますと、やはり西郷隆盛の最大の功績は江戸城無血開城と考えられているからです。江戸城総攻撃の直前に幕府代表の勝海舟との談判で中止を決断したと言われていますが、江戸の街を戦火に巻き込むことなく無血開城が成ったからこそ、明治日本は東京を首都として近代国家のスタートをスムーズにすることができたという訳です。

西郷隆盛の日記はほとんどありませんし、写真もありません。そこで、西郷隆盛という人物に迫るには本人が作った漢詩、周りの人々が記した記録（代表的なものが庄内藩士らがまとめた「西郷南洲翁遺訓」）が非常に大切になります。本日は、それらを通して西郷隆盛の思想や人物像に迫ってみようと思います。

西郷隆盛の書で一番有名なものは「敬天愛人」ですが、これは西郷隆盛自身の言葉ではありません。それは「南洲書」という署名があるからです。西郷隆盛本人が考えた言葉や漢詩の場合は「南洲」とあって、古典や他の人物の作品を書いた場合には「南洲書」と署名するからです。しかし、「西郷南洲翁遺訓」に記されているように、西郷隆盛の思想を端的に表したものと考えられています。そのことは、本当は「隆永」である自分の名前を父親の名前である「隆盛」と間違われた時にも、それを訂正することなくそのまま「隆盛」と名乗ったことから分かります。

その他、西郷隆盛の代表的な作品としては、「獄中有感」、「幾歴辛酸」、「辞闕」などがあり、それぞれその時における西郷隆盛の心情を詠んだ作品とされています。

【第2回目】6月20日(金)18:00~20:00

講師：市村 哲二 先生（鹿児島市立松元中学校教頭）

鹿児島県歴史資料センター黎明館の学芸課、調査史料室に勤務し、近現代史を担当する中で、小松帯刀や桂久武といった家老として重要な役割を果たしたにもかかわらず、これまであまり注目されてこなかった人物に光を当てる研究を行っている。

今回は、維新後の西郷隆盛とそれを取り巻く明治政府や鹿児島の動静について解説していただいた。



テーマ：「維新後の鹿児島と西郷隆盛～廃藩置県と秩禄処分を中心に～」

明治新政府は、中央集権国家を樹立するため、廃藩置県、秩禄処分などの改革を次々に断行していきました。それらの政策は、士族たちにとっては自分たちの存在価値を否定するもので、また生活基盤を大きく揺るがせる大きな出来事でした。

そうした中、鹿児島に帰ってきた西郷隆盛にとって、鹿児島の士族たちの生活を保障することが一番の懸案事項でした。藩政時代と同様に奄美の黒糖を一手買いして利益を上げる「大島商社」の設立は、そうした流れの中で捉えなければなりません。なお、「大島商社」の設立に大きく関わっていたのが桂久武であり、桂は鉾山開発など五代友厚の支援も受けながら模索していきました。

鹿児島県の初代県令大山綱良は、貧窮士族の救済を目的として私学校（各地の分校も含む）の生徒たちを県庁職員として採用することによって、地租改正など新政府の改革政策を進めようとしていました。政府も可能な限り鹿児島県の状況に配慮し、対策をうっていきます。政府の中心にいる大久保利通や政府を離れた五代友厚なども薩摩藩の状況を掌握しようと尽力しています。しかし、こうした動きもなかなか成果をあげることができず、最終的には西南戦争へ突入していきました。